



Title	観念構成的な語用論的能力の形成に関する研究ノート
Author(s)	大竹, 政美
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 108, 115-118
Issue Date	2009-07-15
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.108.115
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38812
Type	departmental bulletin paper
File Information	108-010.pdf



観念構成的な語用論的能力の形成に関する研究ノート

大 竹 政 美*

Notes on Formation of Ideational Pragmatic Competence

OTAKE Masami

【目次】

はじめに

1. 語用論的失敗の存在と外国語教授の課題
2. 言語的コミュニケーションの推論的モデル
3. 「質の格率」あるいは「真実性」の特殊な性格

【キーワード】外国語教授，コミュニケーション能力，語用論的能力，観念構成的，協調の原則，質の格率

はじめに

筆者は，大竹（1997：67）において，外国語教育の教育内容体系のうちの観念構成的な語用論的能力を形成する部門に属するものとして，グライスの「協調の原則」を取り上げた。本稿では，この原則に包摂されている「質の格率」の位置づけを明らかにすることを試みる。

1. 語用論的失敗の存在と外国語教授の課題

Thomas（1983）は，話し手の「言語能力」（linguistic competence）が「文法的能力」（grammatical competence）と「語用論的能力」（pragmatic competence）から，すなわち，「音調，音韻論，統語論，意味論等々の‘抽象的な’あるいは脱文脈化された知識」と「特定の目的を達成したり文脈の中で言語を理解したりするために言語を効果的に使用する能力(ability)」から成るであろうと考えている（p.92）。それに対応して，「文法的誤り」（grammatical error）から「語用論的失敗」（pragmatic failure）を区別している（Thomas 1983：94）。後者は，話し手の目標を達成しそこなったものであり，「言われていることによって意味されていること（what is meant by what is said）を理解することができないこと」である（Thomas 1983：94, 91）。前者の場合には話し手は最悪でも「話がへただ」と非難されるだけだが，後者の場合には「ふるまいがまずい」，すなわち，「真実を言わない，人をだます，本心を言わない人物である」ととがめられそうである（Thomas 1983：107）。

外国語教授は，学習者に「メタ語用論的能力」，すなわち，「言語使用を意識的な仕方的分析する能力」を発達させるべきである（Thomas 1983：98）。「語用論的規範」の「明示

* 北海道大学大学院教育学研究院

的な定式化」, 「語用論的な意思決定の過程を明示的にする道具」を学習者に与えることが必要なのである (Thomas 1983: 109, 110)。

2. 言語的コミュニケーションの推論的モデル

Akmajian et al. (2001) が提示している言語的コミュニケーションモデルである「推論的モデル」 (the Inferential Model) によれば, 言語的コミュニケーションは, 一種の「協調的な (cooperative) 問題解決」である。話し手の観点からすると, 問題は, 「話し手のコミュニケーション意図 (communicative intentions)」を聞き手が認識することを容易にするような表現を, 「発話の文脈」が与えられて選ぶことである。聞き手の観点からすると, 問題は, 話し手が選んだ言葉と発話の文脈に基づいて, 話し手のコミュニケーション意図を成功のうちに認識することである (p.371)。

「コミュニケーション能力」 (communicative competence) は, 部分的には, 「ある種の語用論的方略 (strategies) を身につけること」から成る。それぞれの方略は, 「推論のパターン」と「さまざまな推定 (presumptions) と共有の文脈上の信念とへの訴え」を含む (Akmajian et al. 2001: 386)。「表現の発話」から「話し手のコミュニケーション意図の, 聞き手の認識」に至る, 話し手と聞き手に「共有の信念・推論体系」が働いているのである (Akmajian et al. 2001: 370)。

共有の信念あるいは推定は, 次のとおりである (Akmajian et al. 2001: 371)。

言語的推定

そうでないという証拠がない限り, 聞き手は, 表現の意味と指示対象を発話の文脈で決定する能力があると推定される。

コミュニケーション上の推定

そうでないという証拠がない限り, 話し手は, 何らかの認定できるコミュニケーション意図をもって話していると想定される。

文字どおりであることの推定

そうでないという証拠がない限り, 話し手は, 文字どおりに話していると想定される。

会話の推定

関連性: 話し手の所見は, 会話と関連性がある。

誠実性: 話し手は, 誠実にふるまっている。

真実性: 話し手は, 何か真実であることを言おうと試みている。

量: 話し手は, 適切な量の情報を提供する。

質: 話し手は, 自分が言うことに十分な証拠を持っている。

このうち, 「コミュニケーション上の推定」と, 「会話の推定」の中の「誠実性」は, 日本の外国語学習者にとって特に重要である。というのは, 「私たちの会話意識」が次のようだ

からである（加島 1991: 31–32）。

私たちの日常会話では、しばしば自分の考えをはっきり表わさない。自分の考えを明らかに表現することなど、会話ではさほど大切だと思っていない。そしてしばしば、相手の考えをも大切に聞こうとしない。もっと別のことに気を配って会話を運ぼうとすることが多い。この心の態度だけは英語の会話に持ちこんではならない。自分の考えや感情をのけて会話が運べると思うのは間違いであり、相手の考えや感情が分からずにただ肯くの会話を思っているのではない。そうした輪郭もなしに、互いに漠とした融和の気持ちのまま終わるような会話は、欧米人には不可解な、むしろ不愉快な時間なのだ。

3. 「質の格率」あるいは「真実性」の特殊な性格

Akmajian et al. (2001) の「コミュニケーション上の推定」と「会話の推定」は、グライスのである。これらは、「協調の原則」（the Cooperative Principle）、すなわち、

会話中の発言を、それが行われる段階で、自分が従事している話のやり取りの受け入れられた目的あるいは方向によって要求されているようなものにせよ。

という一般的原則と、4つのカテゴリーの「格率」（maxims）・「下位格率」（submaxims）、すなわち、

質：発言を真実であるものにしようとせよ。

1. 虚偽であると信じていることを言うな。
2. 十分な証拠を欠いていることを言うな。

量

1. 発言を、（やり取りの目下の目的のために）要求されているだけの情報を提供するものにせよ。
2. 発言を、要求されている以上の情報を提供するものにするな。

関係：関連性のあることを言え。

様態：理解しやすい言い方をせよ。

1. 表現の不明瞭さを避けよ。
2. 多義性を避けよ。
3. 簡潔な言い方をせよ（不必要なくどさを避けよ）。
4. 整然とした言い方をせよ。

とに相当する（Grice 1989: 26–27）。

ここで、すべての格率が平等にできているわけではないことに注意されたい（Grice 1989: 371）。

諸格率は、対等であるようには思われない。質の格率は、にせのというよりは本物の（偽

りのというよりは真実の) 発言の供給を命じており、発言を産出するための多数の処方の中のただの一つであるようには思われない。むしろ、何かがともかく何らかの種類の発言であることと、(厳密に言って) そうでありそこなうことの間の違いをはっきり説明するように思われる。虚偽の情報は劣った種類の情報ではない。それはただ、情報ではないだけだ。

質の格率あるいは真実性には、特権的な地位が与えられている。というのは、それが遵守されなければ、残りの格率のどれでもがいかにして満たされうのかわかりにくいからである(Horn 2004: 7)。質の格率は、外国語教育における観念構成的な語用論的能力を形成する部門で残りの格率がどのように再構成されようとも(例えば、亘理(2007: 61-64)を参照されたい)、そのまま保持されると考えることにする。

参考文献

- Akmajian, Adrian, Richard A. Demers, Ann K. Farmer and Robert M. Harnish. (2001). *Linguistics: An Introduction to Language and Communication*. 5th ed. Cambridge, MA: MIT Press.
- Grice, H. P. (1989). *Studies in the Way of Words*. Cambridge, MA: Harvard University Press. [ポール・グライス著, 清塚邦彦訳. (1998). 『論理と会話』. 東京: 勁草書房.]
- Horn, Laurence R. (2004). Implicature. In Horn and Ward (eds.), 3-28.
- Horn, Laurence R. and Gregory Ward (eds.) (2004). *The Handbook of Pragmatics*. Oxford: Blackwell.
- 加島祥造. (1991). 『会話を楽しむ』. 東京: 岩波書店.
- 大竹政美. (1997). 「語用論的観点から見た外国語教育の目的・内容」. 北海道大学教育学部紀要74, 63-70.
- Thomas, Jenny (1983). Cross-cultural pragmatic failure. *Applied Linguistics* 4, 91-112.
- 亘理陽一. (2007). 「文法教育の内容編成の基盤としての語用論的原理—英語の比較表現への適用—」. 北海道大学大学院教育学研究科紀要 100, 51-76.